

うえだ 環境市民会議 News

第54号

うえだ環境市民会議の活動には、誰でも、どのプロジェクトチームにも参加できます。参加ご希望の方は、生活環境課までご連絡ください。豊かな環境を未来に残すために、一緒に活動しましょう。

この情報誌は自治センター、公民館、図書館、情報ライブラリー、市生活環境課の窓口で配布しております。

発行：うえだ環境市民会議

〒386-8601 上田市大手一丁目11-16
上田市生活環境課内

電話：0268-23-5120

FAX：0268-22-4127

E-mail seikan@city.ueda.nagano.jp

2020年は新型コロナウイルスの影響で、うえだ環境市民会議としての活動ができませんでしたので、せめて「うえだ環境市民会議 News」を発行したいと考え、議長・副議長をはじめ企画運営委員がコロナ禍での想いや考えていることなどを自由に書きました。お時間のあるときにお読み頂ければ幸いです。

おうち省エネ

うえだ環境市民会議議長 末広 繁和

コロナに惑わされている間に東北の異常豪雪にも見られるように地球温暖化は着実に悪化している。日頃、企業のEMS支援をしているが、2011年の東日本大震災を機に仲間と共に家庭の省エネの出前講座等を行っている。

我が家でも毎年年末に環境家計簿を整理している。2016年度より451kg-CO₂削減してきた。しかし、2020年度は巣ごもりの影響か、前年比18kg-CO₂の微減であった。

日常生活での工夫として、①アルミサッシの断熱にプチプチを張り、レール部には隙風防止シート、②ファンヒーターの熱を炬燵で利用、③風呂は追い炊きしない、節水シャワー利用、④照明はLED化、シーリングライトは効果的である。この他にPC周りの節電、凍結防止帯、エコドライブなどを実践中。これら、家族で行う小さな工夫の積み重ねも楽しいものである。



核のお金で揺れる町

うえだ環境市民会議副議長 村山 顕

2020年12月14日にテレビ信州で放映された、NNNDキュメント'20「核のごみは問いかける。『尊重』の先には…」を観た。

「ここは北海道寿都町、この町に全国からゴミが集められるかもしれない。核のゴミです。」のナレーションで始まるこのドキュメントは核の補助金で揺れる町の様子を伝えている。

国の調査に協力すれば20億円が手に入る。町長は「町の振興のために20億円は魅力だ。調査を許すだけだから、もしだめなら調査の後、断ればいい。」といい。調査に反対の人たちは、「調査を受け入れれば調査だけでは済まされなくなってしまうのだ。」と主張している。ここでも国はお金をほったたを殴るようなことをしている。

核の問題は安全か安全でないか、危険か危険でないか、ではなく核そのものの存在を許すか許さないかの問題であり、生き方の問題でもある、と思う。



コロナ禍の想い

企画運営委員 宇野 親治

昨年の2月以来新型コロナウイルスの影響で、特に4月の全国への非常事態宣言発出を境に、我々の行動が制限され、今までの行動（活動）が許されなくなりました。

東信地区も一時はレベル5までになり心配はしましたが、やっとレベル1も見えてきました。行動（活動）制限は、やむを得ないですが、誠に残念至極です、このことによって、人間の心の絆まで細くなり、個人としてもモチベーションを維持するのに苦労しております。うえだ環境市民会議の活動もほとんど出来ず、長野県が2050年度までに二酸化炭素排出量を実質ゼロにする、ゼロカーボン条例制定、気候非常事態宣言、長野県気候危機突破方針などの実現に、新型コロナウイルスが大きな壁となり遅れているように感じます。もう一度皆が原点に立ち返り、何が出来るか、何をするか考えたいです、全てを新型コロナウイルスのせいにはしたくはありません。

禍を転じて福となす

企画運営委員 大内 薫

昨年来のコロナ禍で、老若男女問わず（我が家の4歳の孫までも）みんなマスクを着けて歩いています。今までこんな事があったでしょうか？マスクを着けるのは風邪を引いた時くらいだったのに、今は何もなくても着けなければならないし、人前で咳をするのも気が引けます。私は冷たい風に当たると咳が出て、それも季節の変わり目には何か月も続くことが多いので神経をととても使っています。

マスクを始め、私たちの生活はコロナ前後では大きく変わってしまいました。例えば、週一回・月一回の楽しみな外食も躊躇してしまい、出前やテイクアウトで我慢しています。そのため飲食店の収入は減り苦しんでいる一方、外食産業は収益を伸ばしているようです。会社もテレワークが多くなっているようで、ある人に「会議は、直に顔を見なくても支障はないのですか？」お聞きしたら、「ない」とのことでした。そして、「在宅ワークをしてみると、無駄な仕事も判明した」と聞くと、「ええっ！」とってしまいます。

私たちの生活も企業の働き方も変革を求められているようです。そして、私たちは、今までと違うニューノーマルな生活に適応していくことが求められているのでしょうか。

2050 ゼロカーボン実現に向けて

企画運営委員 柴崎 茂利

2020年元旦、「今年の夢」「今年の行動目標」等々を確認しながら、神社・仏閣に初詣した多くの人々、私もその一人でした。それから一年が経過して、今振り返ってみると、コロナ！コロナ！の声ばかり聞いていたように思います。

しかも、わが国では、大きな第三波となり、二回目の緊急事態宣言が発令される中、ワクチン接種の報道も聞こえ始めました。しかし、この先行き不透明な状況下では、「不要・不急の外出」を控えることが求められています。

始めがあれば、終わりがあります。私たちは毎日生活しています。明日に生きる子供たちもいます。長野県では2019年12月6日に「2050 ゼロカーボン実現に向けて目指す信州の姿」（再生可能エネルギーの普及拡大、地球にやさしいライフスタイル、エシカル消費、産業イノベーション、持続可能な社会づくり）の宣言がされています。

私たちは、この宣言の意図する「信州の姿」を共有して、当会議の進む道とすることを提言します。そして、関係各位の同意が得られたならば、改めて、この宣言を勉強し、コロナ禍の中でも、私たちに適した活動目標を作成して、行動していければと思います。

コロナ禍の想い

企画運営委員 瀬上 たか子

ダイヤモンドプリンセス号での感染ニュースを、まるで他人事のように感じているあいだに、新型コロナウイルスは全国、(世界中)に広がり、身動き出来ぬ状態となってしまった。

何処にも出かけず、友人とも逢わず、情報はテレビと新聞からという、何とも変則的な生活がほぼ1年近く続いている。老夫婦なのであまり困難はないが、子育て中、仕事現役の若い方々のご苦労は如何ばかりか！若者の自殺増加のニュースも辛い。

コロナ不況のこんな状態なのに、株価は値上がりし莫大な富を得ている人々もいるとは、何という世の中か！

ようやくワクチン接種が始まった。普通の生活に戻るのはもうすぐだろうか？百年に1度襲ってくると云われるパンデミック、コロナ後の世の中が、より過ごしやすくなるよう願うばかりである。

大転換の年

企画運営委員 竹内 秀夫

2020年10月の所信表明で菅首相は、2050年までにゼロカーボンを目指すと言いました。きちんとしたロードマップがあつての発言かは分かりませんが。エネルギーに関しては、3.11をきっかけにきちんとしたロードマップが飯田哲也氏のI S E Pをはじめ、社民党や共産党で作られました。その要点は、私たちの電力消費を半分にし、原発や火力発電から再生可能エネルギー100%に移行するというものです。ちなみに、私の家では、2010年比で2020年までに-49.3%を達成しました。電気を熱として利用するものを転換したり、止めたりすれば、生活の質を落とさずに実現できることが分かりました。

さて、ゼロカーボン達成するためには、どうすればいいのでしょうか？2020年11月にイギリスは2030年以降ガソリン車とディーゼル車の新車販売を中止すると世界に向けて発信しました。無謀のようにも思われますが、これぐらいのペースで転換を図らなければ、2050年のゼロカーボンは達成できません。しかし、電気自動車に移行するだけでは、再び電力消費が増え、火力発電が復活するようなことになるかも知れません。燃料電池自動車や水素自動車の他に水や空気をそのまま動力源にしたような自動車の開発が必要になるのではと思います。



地域交通応援団

企画運営委員 竹田 貴一

コロナ禍で去年は、ほとんど活動できませんでした。その中でも、9月20日にスクラッチデー信州というというプログラミングのイベントがあり、別所線の貸し切り電車を走らせることになりました。当団体に運営をお願いしたいとの依頼があり、お引き受けすることになりました。はじめは、6月の開催予定でしたが、上田市がレベル4ということで9月に延期となりました。当日は早朝より集合し、準備にあたりました。座席の消毒や指定席の札を貼ったりと大変でしたが、

無事イベントを終了することができました。

一昨年秋の台風19号で落ちた、千曲川に架かる鉄橋は3月28日に開通予定です。長野大学のゼミでの講演後に、学生さんに別所線の早期復旧の署名をお願いしたところたくさんの方々にご協力頂きました。一日も早くコロナの終息を願うばかりです。



▲ 別所線鉄橋 (2020年12月撮影)

コロナ禍の想い

企画運営委員 中澤 信敏

始めの頃は、日々変わる感染対策の情報に対して、何が本当なのかを見極め、その対策と自社の体制整備に苦労しました。あまり騒ぎすぎても不要な心配をおおることになり、その上、できることとできないこともある。また、無神経過ぎても社内の感染対策としては問題がある。見えないウイルスに対して社員とその家族の健康、仕事量が激減する会社の経営、お客様への対応など、自分が所属するコミュニティの事業展開への検討など、心配事が次から次へと増えて行き、とにかくそれぞれのタイミングでひとつひとつ片づけていくしかない状態でした。この期間、思った通りに行かないことが多く、自分を見つめ直しその課題が明確になったことは良かったと思っています。ただ、まだ改善されないのはストレスですが… (笑)

今回のコロナ禍での心配事はコミュニケーションがとりづらくなったことです。「今まで通り」ができない中で、日々あった日常と異なる生活を送っている方がいると思います。コミュニケーションをうまく取れる手段を知っている人の影で、籠りがちでストレスを感じながらの生活を止むを得ず送っている方もいるでしょうが、明けぬ夜は無いです。この間に我慢していたことが一日も早く再開でき、色々な気兼ねのない明るく楽しい日常を今まで通り送れるようになることをご祈念いたします。

新型コロナウイルスと放射性物質について

企画運営委員 西山 貴代美

19番目のコロナウイルスということで、コロナの正式名称は、Covid-19 Viruses。マーズやサーズ、スペイン風邪やペストなど、人類は歴史上もう何度もウイルスの脅威に直面し闘ってきている。しかし、放射性物質の脅威には人類史上初めて曝されているのではないだろうか。私はこちらの脅威を甘く見てはいない。

粒子状物質という切り口でウイルスを見てみると、ウイルスは粒径0.01 μmあたりの生物学的粒子状物質で、分類から言うと超微粒子 (ultrafine particle) に相当する。それに対し、放射性物質のセシウムが焼却施設や火力発電所のばい煙に含まれている場合は、全粒子状物質の60%にあたる1 μmの微小粒子状物質 (いわゆるPM2.5) や、ウイルスレベルの超微粒子となって、大気中に排出され浮遊することになる。もちろん、PM10あたりの浮遊粒子状物質 (SPM) にもなるのだが、個体数としては圧倒的にPM2.5やそれ以下の超微粒子の方が多いのだ。

焼却施設やバイオマス火力発電所からのばい煙をフィルタリングするバグフィルターはSPMレベルの粒子は捕捉できるが、粒径0.1～0.2 μmあたりの粒子はほとんどとれないというデータがある。だから、私たち「木質バイオマス発電チェック市民会議」は、ブラウン運動 (超微粒子の不規則な拡散運動) の性質をうまく利用して捕捉する「リネン吸着検査」を行い、大気中のセシウムを監視している。

コロナ禍の想い

企画運営委員 新田 詔三

コロナ禍で私達の生活は変わり、皆様も不安とストレスもたまり、やるせない気持ちの日々だとおもいます。しかし、私達はこの時期も勇気をもって聡明に、元気に、快活に生きたいです、人類の歴史をみても、新たな希望の道は人間の知恵により見事に拓けてきたからです。ルネッサンスの14世紀のペスト菌ではヨーロッパ人の1/3が死亡、1918年のスペイン風邪では5000万人の死亡者がでましたが、しかし、現在は医学、科学は進歩し過去とは全く違います。

(公財)日本獣医学学会では、ウイルスは30数億年前から存在し“推定で85万種類”で、人類の歴史は20数万年です。人類はこのウイルスと共存する宿命にあります。コロナ禍は50年、100年に1度程発生する自然現象で、コロナは生物ではないが、人類は他の生き物とつながった「自然の一部」

であり、生態系維持への警告でもあります。

進化論を唱えたダーウィンは、「この世に生き残る生き物は、最も力の強いものか。そうではない。最も頭のいいものか。そうでもない。それは、変化に対応できる生き物だ」の考えを示し、私達の活動もこの環境の変化を新しい時代の幕開けとして、逞しく知恵を絞り、前進をし、地域に希望を届けたい。

家庭菜園で救われる

企画運営委員 町田 勉

新型コロナウイルスに関するニュース、報道番組等に釘付けの1年であった。振り返ってみるに、3密回避・手洗い消毒にマスク…等、当初言われた感染防止対策は、1年たっても変化はなかった。ただし、個人も社会環境もその対策は工夫と強化をされた。今や日常的に当たり前となり、苦痛や煩わしさを感じなくなってきた。

この間、ごみ減プロジェクトチームの活動は、感染拡大防止のため、やむを得ず何回かの中止を余儀なくされ、活動にあたっては感染防止に細心の注意を払うなど、不本意な1年であった。他の公的な会議や集会も中止や延期に見舞われ消化不良気味。さらに個人的には大好きな高校野球も、中止や無観客試合で一度も球場に足を運ぶこともなく残念。

こんな不自由でストレスの溜まるのを、救ってくれたのが家庭菜園であった。厳冬期を除いて、ほぼ毎日畑に“出勤”していた1年であった。畑ではマスクを初め感染対策の心配は皆無。巣ごもりやコロナ太りの解消には最適。この1年は今まで以上に健康のため、ストレス発散のため、安全・安心でかつ新鮮で美味しい野菜づくりをやっていて、本当に良かったと実感した、コロナ禍の1年の想いであった。

コロナ禍の中で

企画運営委員 山口 春香

現状では先の見えない事よりも、私たちが今できることを！

- ・三密にならないように守り実行する。
- ・不要、不急の外出を避ける。
- ・一人ひとりが自分に責任を持つ。
- ・人に迷惑を掛けない。

以上の様なことは当然のことであり、一人ひとりが分っているが実行されていないのが実情です。皆で実行し、一日も早い収束と安心して暮らせる社会を築きましょう。

「ワクチン」は日本での治験が短いため、一日も早く、一人でも多くの方が「安心」してワクチン接種を受けられることを望みます。